

# INTERVIEW

山口市徳地診療所 管理者兼診療所長  
中嶋 裕先生



## やりたい医療を実現するために、 診療所の医師に。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

### へき地医療支援部で自治医大後輩の支援

山田隆司(聞き手) 今日、山口県の徳地診療所に中嶋裕先生を訪問しました。徳地診療所は3年前に開院し、一昨年当地へ新築移転して1年余りが経ったわけですね。

早速ですが、先生が卒業されてからこれまでの経緯を簡単に紹介していただければと思います。

中嶋 裕 2002年に自治医科大学を卒業して、2年間山口県立総合医療センターで研修をしました。そのあと、山間部の小規模病院、当時75床だったと思いますが、下関市立豊田中央病院で内科の常勤医として勤務しました。そこは人口7,500人ほどの地域で、私を含めて内科医3人、外科医1人、眼科医2人の6人体制でした。

そこに3年間いた後は、後期研修で県立病院に戻り、主に循環器内科を研修しました。その後、日本海側にある萩市の離島見島の診療所に2年間年間勤務しました。義務年限の最後1年を下関市の角島という、私が赴任する10年前に橋がかかった島の診療所で勤務しましたが、義務年限明けなのでその年に離れることもできましたが、もう1年延長して10年目までそこにいました。

山田 義務は明けていたのですね。それからどうされたのですか。

中嶋 私が10年目を終える1年前に、JADECOR理事(山口県23期)自治医大のラグビー部の先輩で

もある原田昌範先生がその総合医療センターのへき地医療支援部に戻ってこられていて、一緒に仕事をすることにしました。

**山田** 原田先生がへき地医療支援部に呼んでくれたという形ですか。

**中嶋** 声をかけてくれたこともあります。10年目に今後どうするかと考えたときに、特に専門には興味はなかったし、角島では結構地域の活動が楽しかったのですが、楽しいところは自分ではなくても後輩も楽しくやってくれるだろうと思いました。ただ、義務年限内にはそれなりにへき地勤務では苦勞もしましたので、そういった苦勞しながらも楽しくやっていけるよう医師のサポートでその地域が盛り上がりたと思うに至り、へき地医療支援部を選びました。

**山田** なるほど。普通は楽しいと自分が続けてしまうものなのに、そこはえらいなあ(笑)。へき地医療支援部というのは、その年から始まったのですか。

**中嶋** もともと県立病院には地域医療部というのがありました。でも当時ちょうど地元大学に地域医療推進学講座ができ、似たような名前になってしまうため、地域医療支援部ではなくへき地医療支援部にされました。機能はそれまでと変わっていません。

**山田** へき地医療支援部では、どんな仕事をしてい

たのですか。

**中嶋** 巡回診療と代診がメインの仕事でした。

**山田** 総合医療センターに籍を置いて、そこでの仕事も兼務していたということですか。

**中嶋** そうです。

**山田** そうすると外来とか病棟業務なども持っていたのですか。

**中嶋** 原田先生と私で始めたときには、救急の平日半日の2コマを2人でやり、定期的巡回診療2ヵ所と定期的代診を2診療所抱えていたので、毎日どちらかは出ていました。

**山田** 代診といっても定期的な代診があったということですね。

**中嶋** へき地診療所の代診も予定されているものであれば、ある程度の地域また受診患者の調整もつきます。定期代診のために、緊急的な代診が発生した際にそのやりくり大変苦勞し、時には緊急代診に応えることができていない現状がありました。代診はできるだけ使わずに定期的な研修が取れるように、自治体にも理解してもらいながら徐々に変更してもらいました。

**山田** なるほど。そういうふう卒業生が自ら後輩のへき地診療所の業務を支援する仕組みを作ってきたというのが山口県の立派なところだと思います。

## 行政医を経験して

**山田** へき地医療支援部ではどのくらい勤められたのですか。

**中嶋** 4年です。内科の病棟管理をやりたいという思いがずっとあったので、もう1人入ってもらって3人体制になったところで、4~5床の

内科ベッドを持つようになりました。一応「へき地医療支援ベッド」ということでしたが、実際には救急でどこの科にも属さない、いわゆる総合内科が中心でした。

**山田** その枠組みでは何年くらいやったのですか。